遊子一夜砧に韻をさぐりけり

岡野知十と半面派

岡野知十、今は秋聲會を出でゝ別派を開けり、「俳諧に半面派あり櫻かな」とは蓋箇中の消息を傳ふるもの、自ら稱して新々派といふ、其志更に一新調を作爲せんとするにあるが如し、固、一茶より其角に入り星菫の色彩を加へて一家をなせり、維竹の「て」ぬけ調を採り好むで二段切を用う、

墨すれば梅薫るべし文字が關

庭十歩市隱の門や若楓

茶の花の垣根をのぞく雀かな

巻紙にこの月影をうつさばや

三日月に沈むや空の水淺黄

大野酒竹

大野酒竹、其長ずるところは俳書並に俳史の研究にあり、蕪村風の客觀句を作り、一時秋聲會の新俳壇に雄たりき、今之等諸氏の作を示さむ、

松宇、無黄、愚佛、臨風、蝶二、酒竹の作品

明けかゝる蓮に人あり霧の中　松宇

竹の落葉風もあらなく婆娑と散る　同

月の芒しばらくあつて戰ぎけり　同

夏の月槐の上を徘徊す　同

遲々として日永き牛の手綱哉　無黄

動員令氷る扃を叩きけり　同

舞ふ人の水干に花の吹雪哉　同

明鏡や嬋好が閨の白牡丹　同

白河やあけて夜氣車の家根の霜　同

春の雪ねぶるや猫のよそ心　愚佛

浪涼し松一樣に風の磯　同

曉や女松に消ゆる春の雪　同

土筆菫に沿ふて立てるかな　愚佛
春の月秣ふ軍馬照らしけり　同
春の月花神朦朧として出るべう　臨風
若葉して糺の森の火の赤き　同
夕月夜田植もどりの小唄哉　同
五家庄や平家の子孫畑を打つ　蝶二
葉櫻やまだ剃り立ての眉青き　同
夏草やうはさばかりの寺普請　同
拍手や神馬嘶くわさざくら　酒竹
櫻田やお城の崖に殘る雪　麥人
どた〳〵と雪落つる音や庭の松　同
殘雪や石に交りて物の陰　同

雪の村十町ゆけばとなりかな　麥人

如上諸氏の外、俳壇に幸堂得知、泉鏡花、柳川春葉、太田南岳、小峯大羽、三澤素竹、福原羽六、大島寶水、谷活東、鈴木苔花、雨谷一栞庵、幸田露伴等あり、各〻其特色を發揮して新聞に雜誌に其詞花を飾れり

(九) 明治の漢詩

德川時代漢詩を以て家に名あるもの、九州に廣瀨淡窓あり、旭莊あり、中國に菅茶山あり、賴春風樓あり、賴山陽は抒情的漢詩人として忠烈の至情を樂府體に試み、廿八字の詩に名ある藤井竹外は京畿の間に割據し、方に之れ黃綠繡錯の觀ありき、關東にあつては美濃の梁川星巖江戸に來りて玉池吟社を神田に開き徠翁南郭以後一段の光彩を發揮したりき、星巖固之れ忠誠憂國の士、區々繩墨の詩人にあらずと雖も、風藻清

明治漢詩壇に於ける諸詩星

高にして聲調絶佳、岡本黄石、小野湖山、大沼枕山、鱸松塘等皆門下の選、天下の桃李其門に集まりて優に詩壇の覇權を掌握したりき、然りといへども當時國内多事にして外患荐りに起り、風雲日に急に慷慨憂國の士筆を投じて戎軒を事とし、二百餘年惰眠を貪りたる桃源の夢破れて開國の實は擧がりたり、三百諸侯に覇たりし德川の政は寒山霜を踏んで狡兎を追ひたる薩長土肥の青年によつてくだかれたり、而して王政の古に復するや、西歐文物の輸入に急にして、漢詩は其勢微々たるの觀ありき、此時に當り星巖の風を學んで、まづ旗を擧げたるものを大沼枕山となす。

枕山は江戸の人、下谷吟社を開き宋の陸劍南の詩を宗とし、交ゆるに蘇黄范楊の諸家を以てす、其門に學ぶもの都鄙に遍く一時詩壇の盟主となり、宋詩に謳歌するもの頗る多かりき、此時に當り岡本黄石は讀杜詩社並に麹坊吟社を創立して盛に杜詩を皷吹し、小野湖山は白詩を宗とし、森春濤は茉莉吟社を組織して、明治八年七月を以て新文詩といへる雜誌を出だし、明末清初の詩調を皷吹し枕山に代はりて一代の盟主となりたりき、丹羽花南、永阪石埭、橋本芙蓉等皆門下の錚々たるものなり、要するに新文詩は臺閣の分子多く以て一時の盛を極めたりと雖も、如何せん其詩趣を解するものは當時僅に高等の漢詩漢文に通ずる國民の一小部に止まり、未だ一般の好尚に適する能はざりき、此時に當り一般的の詩體のあらはれ來るは自然の順路にして、決して怪むに足らず、果せるかな一團の新詩體は成島柳北の手によつて朝野新聞社の一隅に起れり、而して其機關雜誌を「花月新誌」と稱す、詩は大槻盤溪、大沼枕山、小野湖山、森春濤、鱸松塘等を主とし、文は川田甕江大阪の菊地三溪等を主として編輯せられ之を新文詩に比すれば江湖の風ありき、其發刊

の辭に曰く、

「花と云ふ何ぞ必しも梅杏桃李を問はん月と云ふ何ぞ必しも朧望明魄を論せん、夫の紅樓解語の花、青衫掌端の花、亦是れ絶艶の人を動かすものあり、才人方寸瑩々の月、靜女奮臺團々の月亦是清輝の人を照らすものに非らずや、然らば則、四時各所何くに往くとして花月ならざらん、瓊筵以て開く可く、羽觴以て飛ばすべし、是れ、花月新誌の作る所以なり、友人櫻井敬三、客歳官許を得て花月社を開き將に以て花月の情事を海内の才子に商量せんとす、敬三素より社主たりと雖生計の繁忙なるを以て、余に托して其事を督せしめ、假に本局を朝野新聞社の一隅に設く、余や性太だ疎懶、且既に朝野社に長たり、何ぞ能く負荷に堪へんや、然りと雖も座花の興、醉月の遊に至ては四十年來宿因未了せず、夫の天香國色、玉蟾金龍の余が前に現出するに當つては、焉ぞ垂涎三尺ならざるを得ん、乃ち千里書を飛ばしして之を老友菊地三溪翁に謀る、翁も亦同病相憐むの人、欣然此舉を佳とし一臂以て相扶くるを許す、余更に盤溪、蕓江諸名流に迫り、其錦囊の秘蓄を奪ひ來り、以て江湖に衒せんとす、亦是れ昇平の一樂事ならむか、然れども余や既に社主の委托を得て其事を監す、故に採錄する所、亦唯余の好む所に從ふのみ世の斯誌を觀閲する者、請ふ之を詩文集視すると莫れ、道德家は之を諧謔と嘲り、輕躁家は之を陳腐と罵るも亦敢て顧慮する所にあらず、果して其眞情趣を識らんと欲する者あらば、扁舟を墨江に棹し、孤瓢を東臺に提げ往て花神と月蛾とに問へ」

柳北、家世々幕府に仕へ、經學文章を以て鳴る、前に錦江あり、東岳あり、後に柳北あり、都城柳原の北に家するを以て柳北と號す、維新以後官途に仕へず、滑稽諧謔の文字を羅列して諷刺の意を表はしたりき、文は今日

詩社の有せざる諸星

より之を視れば一個の技術的にして取るに足らざれども、其詩は纖好誦すべきもの多し、要するに柳北といひ、櫻痴といひ、當時の文壇に或は詩壇に濶歩したるの士は、春宵一刻千金の豪奢を試み、春花秋月、傾斜に徘徊し、脂粉の臭ある筆を以て文を草し、詩を吟じ之を江湖に表白して憚らざりしなり、後年、骨なく、血なく、涙なく、愛なく、只青春の劣情を挑發するを以て能となす戀愛文學なるもの〻伏線となりしは心あるもの〻痛惜止まざる所なり、「新文詩」「花月新誌」と前後して佐田白茅の「明治詩文」、服部撫松の「東京新誌」、關謙三の「鳳鳴新誌」あり、梅亭化三の「團々珍聞」は滑稽を主とし、浮華淫靡の「東京新誌」と對したりき。

以上實に明治の初年より十六七年までの傾向にして、吟社及詩社を有せざるものにして優に一家をなしたるは、鷲津毅堂、菊地溪琴、橋本芙蓉、永阪石埭、丹羽花南、杉浦梅潭、神波即山、伊藤聽秋、田邊蓮舟、向山黃村、秋月天放、信夫恕軒、龜谷省軒、大島怡齋、蒲生重章、廣瀨靜村、長三州等なり、三州の詩格調高く其書の如し、明治の初年命を奉じて清國に航し、歸來吟情を發露せるもの朗々誦すべし。

詩文詳解

又純詩人にあらずして別に自家の本領を存し夙に熊本の三才子と推奬せられたる、梧陰井上毅、井々竹添進一郎、甕谷岡松辰の如き、村上佛山門下の俊才青萍末松謙澄の如き、將又中州三島毅の如き、古梅巖谷修の如き、孝女白菊の長篇に名ある巽軒井上哲次郎の如き、多士濟々たりしと雖も、只適當なる機關雜誌を有せざりしが爲に其普及を圖るに於て缺如たるものありき、然るに十四年に至り詩文詳解の刊行せらゝや、其賣行都鄙に遍く多數の讀者を有し一時の盛を極めたりき。

漢詩の衰運

然れども當時我國民は西歐文學の研究に從事するもの多く、或は羅馬字會、及假名の會等、漢文學に抗する組織は表はれ來り隨つて漢詩の

漢詩の文學的價値

衰運を來たしたりき、其羅馬字といひ、假名の會といふもの多くは之れ雷同附和の徒たりしは矢野龍溪「日本文體文字新論」を著はし漢字の利を極言するに及び、烏合輕佻の徒直ちに其旗を翻へしたるを見ても知ることを得べし、されど惰性の赴くところ漢詩の衰微振はざりしは事實なりき、況んや春濤、枕山、柳北の諸老前後相繼いで歿し、僅に小野湖山の存するのみなるに於いてをや、眞に之れ漢詩壇が蕭條の秋、僅に幕末の遺老が消遣の會として小西湖畔の長酡亭に黃村、梅潭、西岡宜軒、田邊松坡、熊谷三村等の唱和したる晩翠吟社の殘影を留むるあるのみ。

然らば則漢詩遂に文學的價値なきか、曰く否、難者其文字の難澁なるを說くことを止めよ、そは詩形にして其構想とは別種の問題に屬すればなり、詩的の趣味豈西詩の趣味に讓らむや、江南の春は煙雨の中に多少の樓臺を忍び、煙寒水を籠むる秦淮の夜泊は纖妍の景、鎖魂の畫圖を

星社の諸士と其研究

聯想して、人をして恨殺せしむるにあらずや、若し其れ平沙萬里人煙を絕つの光景に至つては、着想鐵岩、千古の絕唱たるを失はず、世を擧つて然かく西歐の韻事に謳歌するも、國民は決して遂に國民文學を沒却し去るものにあらず、漢詩の我國にあるや久し、名は漢詩なりと雖も因襲の久しき、既に同化し來りて我が文學となれり、何れの時か餘炎復燃えざるを得んや。

果せる哉、突如として中央漢詩壇に一結社はあらはれたり、之れ春濤の息にして、詩學詩論に深遠の眼光を有し、年十六「補春天記」を著はし諸老を瞠若せしめたる森槐南を唱首とし、矢土錦山を客星とし、野口寧齋、國分青厓、本多種竹、關澤霞庵、森川竹溪、宮崎晴瀾、岩溪裳川、佐藤六石、大久保湘南、田邊碧堂、落合東廓、桂湖村、大江敬香等を網羅したる星社之れなり。

かくて星社の諸氏は進むで漢詩が文學上に於ける地位を解釋し、其價値を文學界に認識せしめたるの功は沒すべからず、彼の槐南が「唐詩選註釋」を著はし、寧齋が「三體詩註釋」を著はしたるが如き共に之れ苦心經營の作、其妙處を發揮し、病處を指摘し、且作者の生平を叙し、其詩風の傾向を審にし、或は他人の作品と對照し論詩の上に尠からざるの稗益を與へたり、星社の起る時恰も硯友社の起るあり、兩々相對して文學思想界に革新を叫びたるは實に一奇觀なりとす、當時帝國大學出身に中根逍遙あり血あり涙ある純詩人なりしかども不幸早世僅に其遺稿を存するのみ、爾來五年にして、廿七八年の戰役あり、盟主槐南大纛に從ひて廣島にあり、國事匆忙復筆を執るの暇なし、而已ならず星社の諸氏羽翼既になり一方に覇たるに足る、茲に於て各自樹立割據せり、槐南は說詩軒主翁如澹人の名を以て、國民新聞に東京日々新聞に、青厓は種竹と

星社解散後の時壇並に其將來

共に日本に、寧齋は「百花欄」を宰し傍ら太陽に二六に誦天情仙の號を以て其詞筆を揮ひ、其他種竹、裳川、霞庵、東廓等教育に或は雜誌、新聞に其特色を發揮せり、之れ星社が變遷の大略なり、而して右星社に直接に間接に關係したる臺閣の士に、春畝伊藤博文あり、蒼海副島種臣、青山田中光顯あり。

星社解散後詩社の見るべきもの永阪石埭主催の一半兒社、江木冷灰博士の擅欒會、大江敬香の花月社、西岡宜軒の晩翠吟社、田中夢山の剪燭會ありと雖皆之れ同人の會合、其開放主義を取り各方面の詩人を網羅したるは野口寧齋、北條鷗所の發意にかゝる啜茗雅集ありきと雖、今や鷗所歿し寧齋亦不幸短命、日本新聞紙上桂湖村の舞臺となり漢詩壇稍稍寂莫の色を現はせり、今後の漢詩壇は果して如何に推移するか其詩形を保存して依然存すると否とは期すべからざるも久しく短歌と抱

合し俳句と握手して我國文學の發展に至大なる關係を有する漢詩が今後其形式を離れて益々短歌に俳句に新體詩に貢献するところ至大なるべきは予輩の信ずるところなり近くは現代の短歌俳句新體詩が如何に漢詩の影響を受けたることを知るものは何人も非認する能はざるべし。

(十) 明治文學年表

明治元年

社會の狀態

鳥羽伏見の戰、五ヶ條の御誓文を發布せらる、太政官に神祇內國外國陸海軍會計刑部制度の七科を置く、府藩縣を置く、新聞紙の官許を經ざるものを禁ず、京都に皇學所及漢學所を設く、

明治二年

二月柳川春三中外新聞を發刊す、笠亭仙果歿す、三月太政官日誌を刊行す、四月福地源一郎、條野傳平等江湖新聞を刊行す、辻新次等遠近新聞を刊行す、尺振八米公使通辯官となる、十二月加藤弘之立憲政體略を著はす、內田正雄開成所主任となる、橘曙覽歿す、

社會の狀態

開成所を大學南校と改め昌平黌を大學東校と改む、五稜廓陷る、版籍奉還を許さる、新聞印行條例を發布す、府縣に小學校を設く、

文學の狀態

明治三年

横井小楠刺客の害に遭ふ、小野梓岩村通俊と共に東京に來り昌平黌に入る、末廣鐵腸林鶴梁の門に入る、南部義壽修國字論を著はし洋字を以て漢字に代ふべしと建言す、加藤弘之大學大亟となる岡松甕谷昌平學校教授となる、

社會の狀態

新律綱領を發布せらる、

文學の狀態

高山樗牛羽前鶴岡に生る、加藤弘之字語字彙の對譯專務を命ぜらる、尺振八本所相生町に共立學舍を立つ、川田甕江大學少博士に任ぜらる、小野梓大阪に遊ぶ、七月小野梓上海に遊び十一月歸朝す、

明治四年

中村正直スマイルスの自助論を譯す、井上毅大學少舍長となる、曾我耐軒、栗原柳庵、青山佩弦齋歿す、

社會の狀態

文部省を設置す、東京横濱間の鐵道成る、廢藩置縣、岩倉具視、大久保利通、木戸孝允、伊藤博文等歐洲に使す

文學の狀態

二月小野梓米國に遊學す、横濱毎日新聞出づ、箕作麟祥譯萬國新史出版、福澤塾三百廿三名、箕作秋坪塾百六名、尺振八塾百十一名、鳴門次郎吉塾百四十一名、福地源一郎塾七十八名の生徒を有し各洋學を教授す

明治五年

社會の狀態

文部省學制を發布す、神祇省を廢し敎部省を置く、太陰曆を廢し太陽曆を用ふ、徵兵の詔を發布せらる、

文學の狀態

樋口一葉東京に生まる、江湖新聞發兌を禁止せらる、東京日々新聞出づ條野採菊の力により岸田吟香其主筆たり、尺振八大藏省翻譯課長となる、佐原純一町田久成神田に共立學舍を設く、小野梓官命により英國に留學す、新約聖書馬可傳と約翰傳の和譯成る、

明治六年

社會の狀態

征韓論起る岩倉具視の一行歸朝す、西鄕隆盛、江藤新平、副島種臣、板垣退助、後藤象次郎等議合はずして官を辭す、內務省を置く、明六社を組織す、

文學の狀態

福地源一郎官を辭し東京日々新聞に入る、中村敬宇夫婦の理を著はす、西周、百一新論を著はす、敬宇、小石川に同人社を開く、川田甕江、國史編輯仰付けらる、十一月福澤諭吉文學の敎を著はす、明六雜誌出づ森有禮、福澤諭吉、九鬼隆一、西村茂樹、杉亨二、箕作秋坪、中村正直、辻新次、西周、大槻文彥、津田眞道、津田仙諸氏の機關なり、西周、明六雜誌に和文を羅馬字にすべしと論ず、八田知紀歿す、

社會の狀態

岩倉具視、傷けらる、副島種臣、後藤象次郎、板垣退助、江藤新平等連署して民選議院の設置を請願す、佐賀の亂、臺灣を征す、神戸大阪間の鐵道成る、

文學の狀態

小野東洋、米國より歸る、加藤弘之、民選議院開設の建議を駁す、加藤弘之、三等侍講となる、神田孝平、國樂を論じ又演劇改良を論ず、柳北、朝野新聞に入る、森春濤、東京に來る、新島襄、歸朝す、讀賣新聞を發刊す、東京日々新聞、太政官紀事印行の御用を命せらる、服部誠一、の東京繁昌記出づ、末廣鐵腸、曙新聞に入り大に健筆を揮ふ、

社會の狀態

新聞紙條例及讒謗律を發布す、地方官會議を開く、千島、樺太の交換あり、

文學の狀態

明六雜誌廢刊す、西村茂樹、教育史を著はす、末廣鐵腸、曙新聞の編輯中條例違反にて禁獄罰金に處せらる後朝野新聞に入社す、栗本鋤雲、報知新聞を退き、藤田鳴鶴之に代はる、大内青巒、教門雜誌を出だす、新島襄、同志社を西京に立つ、大西祝、同志社に入る、新島襄、木戸公に謁し宿志を吐露す、森春濤、東京才人絶句を編輯し上下二卷となす、春濤、新文詩を出だす、加藤弘之、元老院議官に任せらる、十一月采風

新聞出づ、

社會の狀態

明治九年

熊本秋月、萩地方に賊起る、廢刀令を發布せらる、

文學の狀態

明治十年

三月童蒙新聞出づ、めざまし新聞出づ、服部誠一、東京新誌を出だす、東洋、司法省小亟に任せらる、敬宇の同人社雜誌出づ、竹添井々津田君亮と巴蜀に入り八月上海に歸る、安井息軒歿す、

社會の狀態

內國勸業博覽會を開く、西南の亂、木戸孝允歿す、

文學の狀態

明治十一年

穎才新誌發刊す、二月加藤弘之東京開成學校總理に任せらる、成島柳北、花月新誌を出だす、山田方谷、伊能穎則歿す、

社會の狀態

紀尾井阪の變あり、

文學の狀態

馬場辰猪、英國に留學十年餘此年歸朝す、二月內外教育新報出づ、小野梓、元老院書記官に轉ず、春日潛庵、菊地容齋、大槻盤溪、林鶴梁、芳野金陵等歿す、

明治十二年

社會の狀態

勤儉の詔勅下る、教育令を發布せらる、府會縣會を置く、

文學の狀態

何禮之閲吉田五十穂の萬國人名辭書刊行せらる、新約聖書の翻譯全部成る松山高吉、高橋五郎、奥野昌綱等與つて力あり、加藤弘之、東京學士會員に選ばる、村上佛山、横山由清歿す、

明治十三年

社會の狀態

國會開設請願、自由黨起る、

文學の狀態

四月加藤弘之、文部三等出仕に補せらる、田尻稻次郎、專修學校を立つ、近藤芳樹、土井聲牙歿す、

明治十四年

社會の狀態

諸國政黨起る、國會開設の期を定む、

文學の狀態

明治月報出づ、加藤弘之、大學總理に任ぜらる、井上毅、清國に差遣せられ不在中其父を喪ひ憂鬱殆ど寢食を廢す、馬場辰猪、自由黨に入る、大隈重信、矢野文雄、前島密、小野梓、島田三郎等官を辭す、

明治十五年

社會の狀態

明治十六年

改進黨組織せらる、早稲田專門學校創立、立憲帝政黨起る、速記術始まる、朝鮮の變、日本銀行開業す、

文學の狀態

福澤諭吉、時事新報を創刊す、二月立憲政黨新聞出づ、四月大東日報出づ、高田早苗、天野爲之大學を卒業す、鷲津毅堂、奥宮慥齋歿す、

社會の狀態

官報發刊せらる、假名の會組織せらる、立憲帝政黨解散す、大日本教育會組織せらる、

文學の狀態

明治十七年

竹添井々韓村遺稿を編輯す、大西祝文科大學に入る、基督教新聞出づ、明教新誌出づ、大槻文彥吉、原重俊、近藤眞琴肥田濱五郎、丸山作樂、池原香穉、伊藤祐命、內田嘉一、片山淳吉、宮崎蘇庵、橘良平大井鎌吉、松原勇雄、林四郎、魚住長胤等の假名の會員荐りに自說を唱ふ、

社會の狀態

制度取調局を置く、華族を五等に分つ、朝鮮の變あり、

文學の狀態

二月大同新報出づ、四月新島襄、再び歐米漫遊の途に上る、藤田鳴鶴、文明東漸史を著はす、成島柳北、廣瀨青村歿す、

明治十八年

社會の狀態

天津條約の締結、內閣組織成る、日本郵船會社成る、

文學の狀態

小野梓の日本外交論、民間衰頽論、國憲汎論全部成る、藤田鳴鶴、齊民偉業錄の稿を起す、西村正三郎敎育時論を刊行す、馬塲辰猪、爆烈彈事件の嫌疑の爲獄に下る、井上毅、其母を喪ひ悲慟甚だし、新島襄、歸朝す

明治十九年

社會の狀慮

帝國大學令を發布せらる、大學院設置せらる、

明治二十年

文學の狀態

德富蘇峰、將來の日本を著はす、柴四朗、佳人の奇遇を著はす、條野採菊、やまと新聞を發刊す、加藤弘之、元老院議官に任せらる、馬塲辰猪、出獄して米國に航す、馬塲辰猪、尺振八、小野梓等歿す、

社會の狀態

保安條例發布せらる、政治小說流行す、假裝舞踏會頗盛なり、

文學の狀態

二月蘇峰、國民之友を發刊す、四月中江兆民、醉人の奇論を草す、四月蘇峰、新日本の青年を著はす、若松賤子、巖本善治に嫁す、森田思軒、

明治二十一年

國民の友に小說の自叙體記述體を論ず、七月井上圓了、哲學館開設の趣意を發表す、十月末廣鐵腸、現今の政治社會を著はす、森田思軒、國民之友に詩歌文章の神韻を論ず、鐵腸、雪中梅、花間鶯を著はす、

社會の狀態

市町村制を發布す、樞密院を設けらる、專門學校大に敎則を改正す、硯友社成る、

文學の狀態

森田思軒、國民之友に大東號航海日記を譯載す、三月依田學海、國民之友に戲曲菅原傳授手習鑑を細評す、島田三郎、開國始末を著はす、三宅雪嶺、志賀矧川等雜誌日本人を發刊す、鈴木天眼、獨尊子を著はす、

明治二十二年

島田三郎、歐洲に遊ぶ、博文館日本の時事を刊行す、四月二葉亭四迷國民之友に學術美術の差別を論ず、尾崎學堂退去日錄を著はす、七月二葉亭四迷、國民之友に露人ツルゲヱーフの作を譯載す、金港堂雜誌「文」を發刊す三宅米吉主筆たり、山縣悌三郎少年雜誌少年園を發行す、新島襄大學設立の旨趣を發す、今日新聞「都」と改題す、金港堂都の花を發行す美妙、四迷、學海等執筆す、南翠の照日葵出づ、增田干信の新篇紫史發刊す、東京新報出づ、

社會の狀態

帝國憲法發布せらる、森有禮刺客の害に遭ふ、東京京都間の鐵道開通す、

明治二十三年

文學の狀態

一月山田美妙國民之友に胡蝶を草す、一月朝比奈知泉、賴山陽及其著作を論ず、可行生國民之友にシルレルの作を譯載す、三月加藤弘之、雜誌天則を出だす、八月鷗外國民之友に獨逸文學の隆運を論ず、鷗外於母影を草す、十月文學雜誌しがらみ草紙第一號を發刊す、志賀重昂、南洋時事を著す、西村正三郎米國に留學す、十二月日本人明治廿二年紀事略を揭ぐ、横井時雄、小楠遺稿を編す、高田早苗、美辭學を著はす、大槻文彥の言海出づ、

社會の狀態

第一帝國議會開會、愛國公黨起る、條約改正問題起る、

文學の狀態

一月尾崎學堂、國民之友に歸朝者の價値を論ず、佐々木信綱、千代田歌集を編す、三月國民新聞第一號を發刊す、三月高橋五郎國民之友に佛陀の敎誨十字架の影を揭ぐ、四月蘇峰國民之友に文學者として の福澤諭吉を論す、五月幸田露伴、國民之友に井原西鶴を論す、六月宮崎湖處子歸省を著はす、江湖新聞出づ、矢野龍溪、浮城物語を著はす江見水蔭、江戸紫に脚本漂落佐々木盛綱を草す、十月山田美妙國民之友に日本韻文論を連載す、十一月落合直文新撰歌典を著はす、十二月三上參次、等日本文學史を著はす、佐々木弘綱詠歌自在を著はす、雜誌日本人亞細亞大陸探險と稱する文を揭ぐ、新島襄、村上英俊歿す、

明治二十四年

社會の狀態

三條實美歿す、府縣制郡制を發布す、露國皇太子大津に傷つけらる、敎育勅語を下賜せらる、

文學の狀態

一月朝比奈知泉、國民之友に歷史家としての賴山陽を論ず、三月大西祝、國民之友に悲哀の快觀を說く、五月北村透谷、蓬萊曲を編す、六月谷本富、國民之友に大西祝の心理學上の二大論文を評す、六月末廣鐵腸南洋の大波瀾を草す、九月黑木安雄本邦文學の由來を著はす、九月中島幹事文章組立法を著はす、十月尾崎紅葉の伽羅枕出づ、十月森田思軒の探偵ユーベル出づ、坪內逍遙、早稻田文學を發刊す、福

明治二十五年

地源一郎春日局、小督、高野物語等を著はす、依田學海十津川を著はす、齋藤綠雨の油地獄出づ、田口卯吉、川上廣樹の日本社會辭彙出づ、村上浪六三日月を著はす、中村正直歿す、

社會の狀態

山田顯義歿す、國民協會成る、漢文學講義國文評釋の出版頗る盛なり、

文學の狀態

一月大和田建樹の謠曲通解出づ、一月村上浪六井筒女之助を著はす、一月福地櫻痴脚本平野次郎を著はす、二月日本英學新誌の發刊あり、二月久米邦武史海に神道は祭天の古俗といへる文を草す、二月綠雨

國會新聞に文學界の破廉耻漢を草す、三月磯邊彌一郎英文學講義錄を出だす、三月內田魯庵文學一班を著はす、四月佐々木信綱歌の栞を著はす、七月森鷗外水沫集を著はす、七月正岡子規日本新聞に俳話を掲ぐ、六月坪內逍遙小羊漫言を著はす、八月竹越三叉新日本史を著はす、八月民友社家庭雜誌を發刊す、六月大日本敎育新聞出づ、九月大西祝國民之友に景樹翁歌論を寄稿す、九月星社大會を催す、十月田口卯吉「日本外史と讀史餘論」を著はす、十月芳賀矢一文學者年表を著はす、十一月福地源一郎櫻痴放言を著はす、十一月黑岩涙香萬朝報を出だす、十一月巖谷小波京都に之き大に文筆を揮ふ、十二月櫻痴幕府衰亡論を出版す、十二月紅葉三人妻を著はす、山路愛山塚越停春國民之友に史筆を揮ふ、

社會の狀態

製艦費の詔、井上文相夏期講習會に國文國語を奬勵す、福島安正、郡司大尉の遠征、

文學の狀態

一月湯淺吉郎國民之友に新體詩天地初發を掲ぐ、一月森鷗外柵草紙に審美論を掲ぐ、一月大西祝本鄕會堂に雪嶺の我觀小景を評す、二月三宅雪嶺、大西祝、元良勇次郎の批評に答ふ、二月井上哲次郎國民之友に詩歌改良の方針を論す、二月井上哲次郎と基督敎信者との間に大議論あり、三月高田早苗歷史小說を奬勵す、三月探偵小說大に流行す、三月高橋五郎國民之友に僞哲學者の大僻論を草す、六月戶

川殘花、松村介石等築地に文學會を起す、七月德富蘆花歷史の片影を著はす、三月いさみ新聞出づ、八月中西牛郎世界三聖論を著はす、九月逍遙早稻田文學に小說の不振を論ず、十月逍遙マクベス註解を著はす、十一月二六新聞發刊す、十一月櫻痴櫻痴新篇を著はす、十二月三宅雪嶺王陽明を著はす、十二月德富蘇峰吉田松陰を著はす、十二月民友社歷史攻究法を出だす、福地源一郎劇本東鑑拜賀卷大久保彥左衞門等を著はす、

社會の狀態

大婚式の祝典、立憲革新黨起る、宣戰の詔勅あり、日英條約改正の發布、臨時議會を廣島に開く、

文學の狀態

二月小日本出づ、三月大婚式紀念に關する詩歌文章新聞雜誌に多し、三月秋濤早稻田文學に佛國演劇を論ず、四月高山樗牛瀧口入道を著はす、四月魯庵三文字屋金平の名を以て現文學者を詈る、海上胤平日本に和歌を論ず、五月北村透谷自殺す、六月內村鑑三地理學考を著はす、六月國民之友文學三惡徵を說く、七月島村抱月後藤宙外專門學校を卒業す、七月文科大學廿一人の卒業者を出だす、八月柵草紙休刊す、十一月塚越停春近松門左衞門を著はす、十一月逍遙桐一葉を著はす、矧川日本風景論を著はす、十二月帝國文學會なる、戰爭に關する作品多し、國學院雜誌發刊す、寺田星川淨瑠璃史を著はす、鹽井雨江湖上の美人を譯す、田口鼎軒東明けじ論を草す、川

明治二十八年

崎紫山相馬三傑を草す、西村天囚福島中佐言行錄を草す、浪六二荒おろし栃木の鎭臺を著はす、幸田露伴覺夢居士を草す、石橋忍月紅葉とコクサイ坊主と孰れが優るの辨を草す、

社會の狀態

熾仁親王殿下薨御、清國使節李鴻章馬關に來る、媾和條約調印、能久親王殿下薨御、平安奠都千百年祭あり、

文學の狀態

一月博文館新に太陽並に少年世界を發刊す、巖谷小波少年世界を主宰す、帝國文學を發刊す、藤岡作太郎日本風俗史を著はす、大西祝太陽に文學者の新事業を論す、國民新聞當世百面相を載す、六月小杉榲村大日本美術史第一卷を著はす、七月內村鑑三國民之友に何故に大文學者は出でざるかの文を草す、文科大學廿六人早稻田專門學校文學部十七人の卒業者を出だす、民友記者戀愛小說の盛行を以て民心の倦怠となす、九月知十每日新聞に俳諧風聞記を草す、十月新體詩歌集出づ、十月秋聲會組織なる、十二月德富蘇峰妄言妄聽を草し文士を論す、少年園廢刊す、中根重太郎の逍遙遺稿出づ、井上毅の梧陰存稿出づ、鳥居忱大東軍歌を編す、紅葉の不言不語出づ、宮崎三昧目黑物語を著はす、樋口一葉文藝倶樂部ににごり江を草す、時論日報出づ、

明治二十九年

社會の狀態

陸軍を十二師團となす、改進黨革新黨合して進步黨となる、

文學の狀態

一月井上哲次郎帝國文學に比沼山の歌を草す、一月正岡子規俳句の廿四體を說明す、一月帝國文學近世の思潮を論ず、三月芳賀矢一帝國文學に六歌仙を論ず、外山正一新體詩及朗讀法を論ず、浪六當世五人男を著はす、三月姉崎嘲風帝國文學に現實と理想現世と詩人悲曲サッポーを論ず、四月小西增太郎露國に於ける譬喩文學と文豪クルイロフを論ず、七月竹越三叉世界の日本第一號を發刊す、上田敏批評家の任務を論ず、七月幸田露伴新小說を編輯す、十月坪內逍遙文學其折り〳〵を出だす、十二月秋聲會俳諧雜誌秋の聲第一號を發刊す、

社會の狀態

皇太后宮崩御、日露協商の發布、京都大學の設立、女子大學設立の計畫、眞宗大谷派の紛擾甚だし、後藤象次郎、陸奧宗光等歿す、

文學の狀態

一月大西祝早稻田文學に近世美學思想の一班を揭ぐ、一月二葉亭四迷再び文壇に現はる、二月坪內逍遙早稻田文學に脚本牧の方を草す、二月子規漢詩と俳句を論ず、二月內村鑑三萬朝報に入る、三月日刊英字新聞ジャパンタイムス出づ頭本元貞武信由太郎等執筆す、三月三宅雪嶺大詩人は大放蕩の國に出づと論ず、五月高山樗牛仙臺より東京に歸り雜誌太陽文藝欄を擔當す、五月古城貞吉の支那文學

史出づ、五月坪内逍遙坪谷不倒列傳體小說史を著はす、六月博文館外國語雜誌を發刊す、六月木村鷹太郎、湯本武比古、高山林次郎、竹内楠三等雜誌日本主義を發刊す、七月藤田劍峰清國に航す、八月高山樗牛反省雜誌に美文我が袖を掲載す、九月太陽並に諸雜誌に時文評を試むるもの多し、十月大西祝國民之友に啓蒙時代の精神を論ず、十月後藤宙外新著月刊にかげろふを草す、内藤湖南近世文學史論を著はす、新體詩集この花出す、國木田獨歩、宮崎湖處子等の合集抒情詩出づ、島崎藤村の若菜集出づ、森田思軒歿す、漢詩人向山黄村歿す、

社會の狀態

豐太閤三百年祭を行ふ、東京奠都三十年祭を行ふ、第十二議會に彈劾上奏案出づ、進歩黨自由黨と合して憲政黨となる、尾崎學堂高田半峰、德富蘇峰、志賀矧川等勅任參事官に或は局長に任ぜらる、

文學の狀態

一月上田萬年帝國文學に語學創見を草す、帝國文學英國詩壇の藝術的趣味を論ず、五月山路愛山國民之友に自然を讀むの法を論ず、五月浩々歌客國民之友に「與作家諸氏書」を載す、大町桂月詩及散文を著はす、中村秋香新體詩歌自在を著はす、德富蘇峯國民之友に日本國民趣味の墮落を論ず、博文館奠都三十年祭を發刊す、七月蟹江義丸帝國文學に韓國の美學を論ず、七月帝國文學トルストキの新美術論を載す、九月國民之友廢刊す、十一月土井晚翠星落秋風五丈原を草す、早稲田文學廢刊す、十一月田口鼎軒樂天錄を著はす、十二月島田三郎太陽紙上にハミルトン傳を掲ぐ、島崎藤村夏草を著はす、

明治三十二年

新著月刊並に世界之日本廢刊す、

社會の狀態

憲政黨解散す、東京大阪間の電話開始す、帝國黨起る、內地雜居となる、

文學の狀態

一月反省會雜誌中央公論と改題す、上田敏帝國文學に文藝世運の連關を論す、二月高山林次郎帝國文學に詩歌の所緣と其對象を論す、三月帝國文學誌上淺野憑虛の散文詩の成立を揭ぐ、蒲原有明かげ彥の一篇を草す、梅澤和軒帝國文學に紫式部の人生觀を論す、八月戶澤藐姑射太陽に沙劇オセロを譯載す、十一月高山樗牛太陽誌上に月夜の美感を揭ぐ、十一月中央公論社會の敎育者としての新聞記者を論す、十二月井上哲次郎哲學雜誌に宗敎の將來に關する意見を論す、

明治三十三年

社會の狀態

清國義和團の亂、立憲政友會起る、品川彌次郎、黑田淸隆等歿す、

文學の狀態

一月島田三郎太陽に世紀過渡一代の思想を論す、井上哲次郎帝國文學に色彩に附髓する觀念を論す、高山樗牛太陽に抽象美を論す、六月藤村新小說に海草を草す、新小說時代精神を論す、五月登張竹風輓近の獨逸文學を論す、五月帝國文學少年文學の本領を論す、六月博文館十九世紀を出版す、七月帝國文學文學研究の三方法を說く、

九月木村芥舟帝國文學に詩文學系統を掲ぐ、大西祝栗田寛高橋自恃庵等歿す、山内素行帝國文學に文學研究法を論ず、

明治三十四年

社會の狀態

福澤諭吉、伊藤圭介等歿す、清國と列國との媾和成る、星亨刺客の害に遭ふ、

文學の狀態

一月久保天隨、八杉蓼舟、大谷繞石等新文藝を發行す、帝國文學「第二十世紀の新潮流」「二十世紀文壇の曙光」「現代の學風」「新文明と文藝」を論ず、福澤諭吉の痩我慢の說を發表す、日本主義新天地と改題してあらはる、開發社修身童話並に自然之友を發刊す、四月後藤宙外新小說に近來快心の二論文を草す、五月宙外新小說に思想惑亂の時代を載す、土井晚翠西歐に遊ぶ、六月高山樗牛、姉崎嘲風に與ふるの書を掲ぐ、中江兆民歿す、太陽誌上に中江兆民居士を論ずる文あり、後藤宙外新小說に「求むるものを與へよ」てふ文を草す、

明治三十五年

社會の狀態

日英同盟の發表、菅公一千年祭の擧行、東本願寺紛擾す、教科書收賄事件の檢擧、佛のゾラ歿す、早稻田大學創立、

文學の狀態

一月內ヶ崎矢三郎帝國文學に「チャースキングスレー」を連載す、高山樗牛太陽誌上に當今の思想界に對する吾人の要求といへる文を草

す、八月帝國文學自然主義的傾向を論ず、西村茂樹歿す、九月正岡子規歿す、十月姉崎嘲風太陽に再び樗牛に與ふるの書を掲ぐ、岩城準太郎帝國文學に源氏物語の道義觀を連載す、十一月小林一郎帝國文學に詩人プラートンを連載す、十月帝國文學本邦のPRB派を論す、十二月高山樗牛歿す、坪内逍遙文藝と教育を著はす、露伴叢書刊行せらる、楠本西州歿す、尾上八郎利壺の五歌仙を著はす、大橋圖書館成る、萬朝報四ッ目屋事件と題して高等女學校國語讀本に不都合の紀事あるを摘發す、帝國大學國語學書解題を著はす、

社會の狀態

小松宮殿下薨去、小學校令改正せられ教科書國定となる、日本神經學會總會あり、

文學の狀態

一月俳諧雜誌卯杖の發行あり、萬朝報懸賞處世の歌を發表す、芳賀矢一帝國文學に謎に就いて論ず、二月帝國文學近歐の傾向小說を論ず、二月德富蘆花黑潮を出版す、三月丁酉倫理會員中島德藏の件に關し意見書を發表す、四月帝國文學百號紀念號を出だす、五月巖谷小波太陽に居た伯林物語を草す、寒川鐵骨の日記文出づ、帝國文學ワグヲルの世界觀及其先蹤を論ず、德富蘆花壹岐阪會堂に故一葉を論ず、帝國文學海と人生を論ず、尾崎紅葉歿す、十月内村鑑三幸德秋水堺枯川等朝報社を去る、帝國文學會講談會を開く、十一月落合直文歿す、山路愛山獨立評論を發刊す、博文館明治少年節用を刊行す、木村鷹太郎松本亦太郎のプラトーン全集出づ、十二月新小說

尾崎紅葉追憶錄を出だす、

社會の狀態

軍資金一億圓愈々募集に決す、宣戰の詔勅下る、旅順の閉塞隊奮鬪す、故北條時宗に從一位を贈らる、陸軍鴨綠江に得利寺に遼陽に大捷を奏す、

文學の狀態

一月姉崎嘲風太陽誌上に「戰へ大に戰へ」といへる文を草す、天田鐵眼歿す、木下尙江火の柱を著はす、三月田岡嶺雲現代思想の暗流を太陽誌上に草す、五月伊藤銀月人情觀的日本史を著す、湯原元一書趣及詩味を著はす、時代思潮第一號發刊、佐藤紅綠の俳諧紅綠子出づ、丘淺次郎の進化論講話出づ、時代と哲學出づ、野口米次郎の日本少女の米國日記出づ、國學者傳記集成出づ、文學雜誌七人出づ、厨川辰夫帝國文學に英國現代の二詩人を論す、新聲出づ、劍南の理趣情景刊行せらる、久保天隨うえるてるを著はす、福本日南愛國本義を著はす、大西博士全集刊行せらる、笹川種郎帝國文學に俳文一變論を草す、葉山萬次郎獨逸國民文學史を著はす、齋藤信策帝國文學にトルストヰの日露戰爭論を讀みて現代の文明に對する彼が使命を懷ふてふ文を草す、萩之家遺稿出づ、姉崎嘲風復活の曙光を著はす、高瀨武次郎王陽明詳傳を著はす、姉崎嘲風現身佛と法身佛を著はす、戸澤藐姑射淺野憑虛の沙翁全集ハムレットを出だす、幸田露伴の新體詩出盧出づ、薄田泣菫の廿五弦出づ、

社會の狀態

旅順陷落す、日本海の海戰に敵艦隊を全滅す、日露の媾和條約成る、河野廣中等日比谷公園に國民大會を催す、

文學の狀態

一月夏目漱石帝國文學に倫敦塔を草す、二月開發社山櫻集を刊行す、坪内逍遙新曲浦島を著はす、四月田岡嶺雲天皷を發刊す、小幡篤次郎、田口鼎軒、鳥尾小彌太等前後相繼いで歿す、漢詩人野口寧齋歿す、小島烏水日本山水論を著はす、長谷川天溪文藝觀を著はす、茅原華山文明推移論を著はす、七月網島梁川の梁川文集刊行せらる、八月岡倉由三郎文及文の解剖を著す、巖谷一六歿す、小原無弦ユーゴーの詩を著はす、梁川の病間錄出づ、夏目漱石ホトトギス誌上に「我輩は猫である」を連載す、少年雜誌の出づるもの多し、帝國文學シルレルの紀念號を刊行す、芳賀矢一浦島の傳說に就いて時代思潮誌上に論ずる處あり、片山正雄帝國文學に神經質の文學を論ず、上田萬年中央公論に基督敎と言語學佛敎と東洋言語の研究を論ず、高橋龍雄應用言語學を著はす、大村仁太郎我子の惡德を著はす、帝國文學詩人ノワーリスを論ず、戸澤虢姑射沙翁全集第二卷を發刊す、笹川種郎時代思潮に文藝復興と古典研究を論ず、尾上柴舟の金帆出版せらる、蒲原有明の詩集春鳥集出づ、博文館林森太郎の日本文學史を刊行す、千葉鑛藏丁酉倫理會講演集に新曲浦島の人生觀を論ず、鼎浦漁史帝國文學に悲曲新浦島を草す、島村抱月東京日々に文藝評論を連載す、長谷川天溪太陽誌上に表象主義の文學を論ず、

附錄

時代文學者の愛讀書類

明治廿二年德富蘇峰主筆の「國民之友」が當世の所謂大家なるもの六十餘名に其愛讀書目十種の撰擇を需めたると、又同三十年三月竹越三叉主宰の世界の日本記者が、同じく諸名流に向つて、「立志の基礎となりしものと、」「感化を受けしものと、「趣味を感ずるもの」との書目を需めたるとは、現代文學家の思想と其系統とを知るに好當なる答案なるが故に、特に茲に其文學思想家のみの答案を抄錄して參考に供す

書目十種

レッシングのラヲコン。　クルーグ編纂の大家詩集。　エーリングの羅馬法神髓。　マイエルの獨逸國法學。　ウキルマルの獨逸文學史。　ケエニヒの獨逸文學史。

石橋友吉

白氏文集、宗祇の若衆物語、陸放翁詩集、佛山堂詩集、一條兼良の寐覺記、一條兼良の明玄記、蘇東坡文集、鴨長明の四季物語、

長谷川辰之助

ゴンチャローフ著オブルイフ。　ドストエーフスキイ著プレスツプレーニエ、イ、ナカザーニエ。　グオリスキイ著ジエナア。　陸宣公奏議、魏叔子文集、思軒先生譯探偵ユーベル

尾崎德太郎

太平記、枕草紙、風俗文選、娘節用、西鶴一代女、京傳作小紋雅話、唐宋詩醇、西

鶴五人、娘、平家物語、俳風柳樽　大西祝

民友記者足下若し英國文學の大家の中最も生を感動せしめたる者を擧げて貴問の答となすを得ば生は左に載するものを指すべし

ウォルヅウォルス。ベーコン。カーライル。エモルソン。シェーキスピヤー。コールリッヂ。デクインシー。マシウ。アーノルド。オルヴイング。

生は擧げんと欲して擧げ得ざるものあり、即ちラスキンは其中の第一人なり、ミルトンも亦其中の一人なり

史記、韓非子、蘇老泉文集、魏叔子文集、水滸傳、金瓶梅、紅樓、源氏物語、大鏡、徒然草、藩翰譜、椿說弓張月、邯鄲諸國物語、

サッカレー、バニチー、フヘヤ。スペクテートールアヂソン氏。ワシントンアーヴヰング、小品文。カウパーの詩　坪内雄藏

八文字屋本並丸本、枕の草紙一二冊、論語、うづらごろも、春臺獨語　中村正直

四書、五經、左氏傳、韓文、杜詩

ゼ、ブック、オブ、サームス。スペックテートル、アヂソン氏。モンテインス、エッセイス。フランクリンス、アウトバイヲグラヒイ。ヒストリー、ヲブ、シヴイリゼーション、バックル氏。　內藤耻叟

今式、古事紀傳、神皇正統記、日本史並志、保建大記、中興鑑言、下學邇言、新論

弘道館記述義

周官、喪服傳、通鑑、正續文獻通考、玉海、五禮通考、方輿形勢紀要、四庫全書總目提要、經世文編、淸會典　　內田周平

易繫辭傳、中庸、孟子、楚辭、莊子、史記、文選、杜工部集、曾文定公集、程子遺書、朱子文集、張子全書、カント道德學、ヘーゲル形而上學、ハルトマン審美學　　內田貢

徒然草、謠曲數種、近松門左衞門著作、京傳の洒落本、古文眞寶、ツルゲ子ーフおひゞさ及めぐりあひ

Deserted Village, and Traveller.

Spectator (Addison).

Johnson's Lives of the Poets.

Diken's Works.

古今集、新古今集、先哲叢談、韓非子、莊子、杜子附明浦起龍著讀杜心解　　山田喜之助

Smille's Self Help

Poetical Works of Thomas Moore.

〃　Robert Burns.

〃　Lord Byron.

御尋に付き、かねて好む處の書目御覽に入れます、哲學に付ては多少つねに好む處もありますが、此回は文學のみを擧げて其他は省きました　　山田武太郎

源氏物語、貫之集、神皇正統記、史記、賈島佛詩、みるとん詩集、どんきほうて、しえれい詩、ぶゐにてい、ふえいわ、る、みざれぶるす、しるれる詩集

實は讀書が嫌なれば別に愛讀するの書なく澤山に讀むだ事がなければ是といふて採擇するの書も無之候乍去姑く嚙り讀みたるを讀むだものとして申上候へば多分左の如くに可有之候

平家物語、藩翰譜、五代史、水滸傳、田舍源氏、弓張月、ギッボン著羅馬帝國衰亡史、アレキサンドルヂユマー小說（俱英譯）、シエーキスピア全集、シルレル全集（但英譯）

此外には

さごろも、八犬傳、西廂記、孔羊傳、土佐日記、八笑人、好逑傳、韓非子、浮世風呂、リットン卿著、ラストテー、オブ、ポンペー。リットン卿諸劇集。ウオルテール、查斯十二世。モンテスキユー羅馬衰亡史。

野生が讀むを好まざるは政治書其他學術の書なり詮方なく讀みはすれども決して嗜好にあらず哲學書詩集歌集文集は最も嫌なれば讀みたることは無之、世間には野生が少年の時に後漢書を愛讀したるよし申候趣、決して然らず後漢書は嫌に御座候支那の歷史を愛讀したるは五代史の外は史記だけなり要するに議論の書物は嫌で御座る、好な者は歷史小說院本に御座候、夫にては餘り思付が無い樣なれども實情なれば仕方は無之候御一笑奉希候

小中村清矩

群書一覽、拾芥抄、令義解、公事根源、古事紀傳、源氏物語湖月抄、法曹至要抄、貞觀儀式、類聚三代格、延喜式、貞永式目、周易程朱傳義、春秋左氏傳杜預註

饗庭與三郎

今樣廿四孝、廿七松堂集、笠翁一家、曾我物語、根無草、鶴林玉露、五雜俎、雨月物語、琴後集、隨園詩話

源義朝義仲傳、大日本史叛臣列傳、項羽本記、自達磨至慧能諸傳、佛祖傳燈　朝比奈知泉

錄左氏鄢陵之戰、審敵論、杜詩、杏坪古詩

Cliff Leslie's Essays in Political Economy "(From the Collection).

Byron's Odes on Napoleon (From His Poetical "Works).

Tyndall's Belfast Address.　三島毅

論語、孟子、毛詩、尙書、周易、老子、荀子、莊子、史記、左氏傳　元田永孚

神皇正統記、大日本記、日本外史、萬葉集、古今集、菅公歌集、讀史餘論、集義和書、南亭餘韻、程易夜話、星巖詩集、四書、五經、資治通鑑、通鑑綱目、諸葛丞相集、李杜詩集、韓王文集、韓壤集、李忠定公集、朱子文集、文々山集、史可法集、曾國藩集　關直彥

セクスピヤ院本、マコーレー文集、ビクトルユーゴーのレミゼラーブル。サカレーのバニチーフヘヤ。セリダンのスクール、オブ、スカンダル。ビクトリヤンサルドーのバトリー。平家物語、太平記、田舍源氏、八犬傳、膝栗毛、八笑人、いろは文庫、孟子、史記、左傳、八家文　須藤光暉

老子、韓非子、莊子、金聖嘆批評水滸傳、春秋左氏傳、平家物語、折たく柴の記つれ〴〵草、義經記、しぐれ　浮田和民

小生が思想及信仰を養成する所の書は

聖書、ホーマルの詩イリヤド、ポープ氏譯
カアライル氏著、ロッエ氏ミクロコズマス
文章のために愛讀せし所は
史記、國語、三國誌聖嘆批點、馬琴諸書、忠臣藏、白氏文集、福澤福地德富氏
の文　　末松謙澄

管子、韓非子、東坡詩文、壯悔堂文集、繪本豐臣勳功記、開卷驚奇俠客傳、山陽詩集、佛山堂詩集、徒然草、ビーコンスフィルド著アルロイ　　巖谷修

論語、孟子、左氏、莊子、史記、
漢書、昭明文選、唐宋十家文
唐宋詩醇、平家物語、近松氏著院本各種

子類にては管子、墨子、韓非子、鶡冠子
制度類にては、九通
雜部にては、史通、明夷待訪錄、日知錄
詞章にては、國語、擅弓、漢魏百三名家集、徒然草　　井上陳、政

三種書目

世界の日本記者が現代の名流に向つて答案を求めたる三條件は、(一)少年時代に於て立志の基礎となりしは如何なる書なりや、(二)一生を通じて最感化を受けしは如何なる書なるや、(三)平生最も興味を感ずるは如何なる書なるや、の三問にして庶幾くば名流の面目を知り其感化せらるゝところを知りて現代日本の人物と其思想嗜好の

傾向を知るに足らむか、茲に掲ぐるところは主として文學に關係ある人のみを抄錄せるのみ

(一)稗史小說類のみ濫讀いたし居候ひし故これと指して申あげがたく候　坪內雄藏

(二)書物の力にあらずと覺え候　志賀重昂

(三)King lear.

(一)別段に是れと申すもの無之候

(二)クワケンボス氏米國史

(三)江戶名所圖會、京都歲時記、富士百景畫　三島毅

(一)拙老は十歲前後の時漢楚軍談通俗三國誌を讀み候處より昔の豪傑の如く功名を天下に揚げんと日夜焦心し此は學問せざれば難及と思立讀書を始めたり

(二)拙老一生感化を受けたるは經にて詩經書經、史にては史記、子にて莊子と被存候

(三)拙老々後尤も嗜むは論語なり每度讀む程味が出る樣に被存候　內村鑑三

(一)太平記

(二)基督敎の聖書、ダーウキン氏原種論、ブレース氏の人類思想發達史(History of Human Progress.)

(三)聖書、カーライル全集殊にコロムウエル傳、ダンテの聖劇、詩人はローエル、ブライアント、ホイットマンを愛し宗敎哲學はジユリアスミ

ラーの基督教罪惡論を嗜み小説は和洋を問はず一切讀み不申候

杉浦重剛

(一)椿説弓張月、神稻水滸傳、通俗三國誌、通俗水滸傳、通俗西遊記、先哲叢談

(二)殉難前草、殉難後草、殉難拾遺、殉難遺草の類

小笠原長生

(一)小生は少年時代より軍人となりたき志願に御座候處生來多病にてとても素志を貫く事成り難しと殆んど觀念致し居りしに偶まチルソン傳を讀みチルソンが虛弱なりしにもかゝはらず身を海軍に投じて凛乎たる忠勇能く大敵を破り英國をして泰山の重きを致さしめたる蓋世の雄圖を欣慕し斷然海軍と相定め倖に素意の萬分一を得たりと雖前途尙遠く今日貴問に對する如きは汗顏の至りに御座候

(二)小生が最も感化を受けたるは孟子及通俗三國志に御座候孟子は議論奇警三國志は雄大快濶なるを以て常に此二書を繙き候故最も感化を受けたるものと自信致居候

(三)小生が平生最も興味を感ずるは近松巢林子の著作に御座候其文章の流暢なる其脚色の自在なる百讀飽くなきを覺ゆ且其の文法を凡ての文章に應用し得べしと信じ居り候

田口卯吉

(一)小生は少年の時好みて物理化學生理の書を讀めり是れ皆立志の後讀みしにて立志の基礎となりしにはあらず

(二)一休蜷川の歌及莊子などは最愛讀せしものなり、故に感化を受けし所もあらん歟

(三)好みて讀むところの書は歴史なり　坂正臣

(一)十三の時より古道大意を讀みて愛國勤王の志起りぬ

(二)寡慾の感化は徒然草愼獨の感化は玉襷守節の感化は靖献遺言に受けたるもの多し

(三)いつ見ても興味の盡きぬは萬葉集、古事記、日本記　戸川殘花

(一)敬宇先生の西國立志編と兒雷也物語

(二)今日まではバイブルと佛書

(三)今日は五元集、賣茶翁物語、崎人傳の類新聞の講釋師類と太陽の石黒先生の日記の如き品なり明日は知らず　横井時雄

(一)スマイルス氏立志編

(二)聖書に御座候殊に新約書に御座候

(三)論語、陽明文錄、唐宋詩醇、マシウ、アーノルド散文集、テニソン詩集、ブラオニング詩集、小說類にてはヂョーヂエリオット、サッカレー、ヂッケンス、ユーゴー、スコット　巖谷漣

(一)幼時は義經勳功記、新編水滸傳と西遊記が大好き

(二)祖母より聞きしお伽噺に餘程感化されました

(三)太古史及妖怪談時としては能狂言の本　村上浪六

(一)少年時代は唯これ一鄕の惡太郎にて立志の基礎と申すほどの書を記憶いたさず候へども深く讀書に刺戟をうけしは史記の列傳

を初陣と仕り候

(三)平生最も興味を感ずる書は總ての歴史の外に二つのもの御座候
其一は小生の性質及自信に合するの書と其一は小生の性質及自信に小氣味よきほど正反對の書に御座候

黒岩涙香

(一)實語經、三字經
(二)孟子
(三)イゾップ物語、西遊記の類

書といへば右の如く申上る外これなく候然れども第一第二は書よりも境遇に在りし如く覺居候

福本日南

(一)未だ讀書を課せられざるうち英雄百人首を授けられ皆善く背誦せり
(二)長じて好んで古人の傳記を讀みしも亦曩の英雄百人首之が素をなせしならん

南摩綱紀

(一)大學と孟子浩然の章とにあり
(二)論語を以て最第一とす
(三)詩經、孟子、左傳、莊子、八家文等なり
但壯年の時は歴史を樂みしが老來經書の樂最も深きを覺ふ

島田三郎

(一)小學外篇、名臣言行錄、セルフヘルプ、弓張月
(二)靖献遺言、スマイルスの諸著
(三)自娯集、樂訓、常山紀談、言志錄、駿臺雜話、藩翰譜、徒然草、孟子、歐陽修文

集、王陽明文集、ボルク全集、ブライト演説集、コブデン演説集、トッタヴキルの諸著、チヤンニングの諸著、マル・チノーの諸著

井上哲次郎

(一)小生が少年時代に於て立志の基礎となりしは師父及境遇の感化と自發的奮勵心最强大なるものにして書は其次なり、然れども强いて之を擧ぐれば矢張四書なりしが如し、其中にても殊に論語は高尚なる理想を附與するの効ありき詩經は最も愛讀せし所なりと雖も立志の基礎となりしとは思はれず

(二)小生は今尚中年時代にあることなれば一生を通じてとはいひがたきも半生を通じて最も感化を受けたるはカント氏の純粹理性論及びショッペンハウエル氏の哲學書之れに次ぎてはスペンサー及ハルトマン二氏の哲學書其他ギョーテ氏の詩篇殊に「ファウスト」並にダーウキン及びルーソー二氏の書或は之に佛書を加ふるを得ん然れども今後如何なる書の附加すべきやを知らず

附言一節　余は少時より書籍の撰擇てふ事に付ては非常に注意せし所にして可成各學科に就きても所謂大家即ち一派學祖とが非常の感化を其時代に及ぼせし人の書を擇んで讀みたり例へば哲學にてもカントは余の最も研究せし處なり何となればカントは兎に角近世哲學の泰斗にして爾後の學者は多くカントを祖述したるが少なくとも其感化を受けし者にあらざるはなし余は此の如くして大家の書を最初に精撰し而して後第二流三流に及ぼしたり何となれば先入の人に及ぼす感化は實に大なるものにして若し最初に下らぬ人の書を讀んで之が主となれば終生之が邪魔となり他の善き説を排斥して已まず之に反して最初に第一流

この人の書を讀み漸次に第二流第三流に及ぼす時は鑒定力即ち批評眼に富むに至ればなり

輓近各種の雜誌が之に倣いて類似の問題を提出して諸家の答案を求むるの風盛に行はるゝに至りしがども捕捉すべき問題の多きにかゝはらず着眼の點概ね二社の區域を離れず創案の觀るべきもの尠なく答案亦眞摯のもの稀にして只一時の消閑の流行物とならむとするの弊あるは文壇の慶事にあらず

時代文學史　終

時代文學史
（定價金四拾錢）

明治三十九年八月一日印刷
明治三十九年八月四日發行

著者　高橋立吉
發行者　東京市神田區小川町九番地　辻太
印刷者　東京市京橋區築地二丁目二十番地　河本龜之助
印刷所　東京市京橋區築地二丁目廿一番地　株式會社國光社

發行所　東京市神田區小川町九番地（電話本局二四二〇番）　開發社

不許複製

IA98

各府縣賣捌所

東京	東京堂支店
同	東京堂支店
同	東京堂支店
同	東京堂支店
同	東京堂支店
同	東京堂支店
同	東京堂支店
同	東京堂支店
同	東京堂支店
同	東京堂支店
同	東京堂支店
同	東京堂支店
同	東京堂支店
同	東京堂支店
同	東京堂支店
同	東京堂支店
東京	東京堂支店
大阪	大阪堂支店
大阪	大阪堂支店
前橋市	前橋堂支店
吉岡	吉岡堂支店
東京	東京堂支店
枝川	枝川堂支店
律善	律善堂支店
書平	書平堂支店
東兵	東兵堂支店
書衛	書衛堂支店
房助	房助堂支店
名古屋	名古屋堂支店
長野	長野堂支店
越後	越後堂支店
新潟市	新潟堂支店
姫路市	姫路堂支店
同	同堂支店
越後水原	越後水原堂支店
同地	同地堂支店
高田	高田堂支店
常陸水戸	常陸水戸堂支店
同	同堂支店
伊賀上野	伊賀上野堂支店
伊勢山田	伊勢山田堂支店
同	同堂支店
名古屋市	名古屋堂支店
三河足助町	三河足助堂支店
静岡市	静岡堂支店
駿河阿多野	駿河阿多野堂支店
甲斐甲府市	甲斐甲府堂支店
岐阜市	岐阜堂支店
信濃松本	信濃松本堂支店
同上諏訪	同上諏訪堂支店
信濃稲荷山	信濃稲荷山堂支店
同	同堂支店
仙臺市	仙臺堂支店
同	同堂支店
陸前佐沼	陸前佐沼堂支店
陸前森市	陸前森堂支店
長岡	長岡堂支店
川瀬	川瀬堂支店
西澤	西澤堂支店
喜太郎	喜太郎堂支店
代助	代助堂支店
目黒十郎	目黒十郎堂支店
矢内正夫	矢内正夫社支店
北松堂光	北松堂光支店
萬村六	萬村六支店
四ツ橋口	四ツ橋口書店
江藤	江藤書店
高文	高文堂
明文	明文堂
橋川三郎	橋川三郎堂
有星兵衛	有星兵衛堂
古藤久	古藤久堂
精野文	精野文堂
川見義次郎	川見義次郎堂
柳原正	柳原正堂
玉藤成	玉藤成堂
六美琴	六美琴堂
高新書	高新書館
日古堂	日古堂店
及之支	及之支店
松崎祐	松崎祐助店
藤榮堂	藤榮堂店
近泉道	近泉道次郎店
今源次	今源次郎店
今泉	今泉堂
山崎	山崎
佐賀市	佐賀市
熊本	熊本
鹿兒島市	鹿兒島市
北海道札幌	北海道札幌
全	全
同	同
久留米市	久留米市
高知	高知
伊豫松山	伊豫松山
高松市	高松市
德島市	德島市
紀伊田辺	紀伊田辺
岡山市	岡山市
伯耆米子	伯耆米子
宮崎	宮崎
山口市	山口市
加賀金澤	加賀金澤
福井市	福井市
同	同
增田	增田
羽後横手	羽後横手
秋田市	秋田市
酒田	酒田
米澤市	米澤市
同	同
山形市	山形市
名古屋	名古屋
博多	博多
鹿兒島	鹿兒島
永東	永東書店
積善館	積善館支店
吉田幸兵衛	吉田幸兵衛店
牧野德太郎	牧野德太郎堂
五十嵐太右衛門	五十嵐太右衛門店
盛文堂	盛文堂
白崎善兵衛	白崎善兵衛堂
成清	成清堂
大澤見進	大澤見進書店
東海林鮮	東海林鮮書店
東海林太右衛門	東海林太右衛門店
品川宮	品川宮
宇都宮	宇都宮
中井田書店	中井田書店
今井彌三郎	今井彌三郎
武內文	武內文
松崎	松崎
黑崎茂	黑崎茂
宮脇仲次	宮脇仲次
土澤興	土澤興
澤駒書店	澤駒書店
田本	田本
菊竹	菊竹
澤井幸次郎	澤井幸次郎
平崎	平崎
長村	長村
谷貴	谷貴
國藤書	國藤書
富次郎	富次郎
谷	谷

910.26
Ta285z

084906-000-9

910.26-Ta285z

時代文学史

高橋　立吉／著

M39

DBB-0181